

MRI検査における造影剤投与に関する説明

造影剤検査は、造影剤を使用しない検査に比べ、病変がより鮮明に描出できます。

MRI用造影剤は腕の静脈から自動注入器(手動の場合もある)を用いて注入します。

尚、これまでに我が国において報告されているMRI用造影剤による副作用の発生頻度を以下に示します。

| | |
|-----------------------|----------------------|
| 皮膚症状（じんま疹・膨疹・かゆみ・発疹等） | ：0.24%(1000人中2,3人程度) |
| 消化器症状（嘔吐・嘔気等） | ：1.29%(1000人中13人程度) |
| 呼吸器症状（呼吸困難・くしゃみ等） | ：0.06%(1万人中6人程度) |
| 全身症状（アナフィラキシーショック等） | ：0.16%(1000人中1,2人程度) |

※重篤な腎障害のある場合、NSF(腎性全身性線維症)を起こす可能性があります。

造影剤は血管内に確実に注射針が入っていることを確認してから投与を開始しますが、途中で薬が漏れて痛みや発赤などを生じることがあります。

多くの場合は自然に回復しますが、稀に治療が必要となることがあります。

この他、より重篤な症状として、呼吸困難・血圧低下などを起こすことがあります。

また、非常に稀ですが200万人に1人の頻度で死に至る事も報告されております。

万一、副作用が認められた際には適切な処置を行いますのでご安心ください。

時に、注入後1時間～数日後くらいに、上記の遅発性副作用が現れることがあります。

このような症状が認められる際には、直ちに病院(担当医)までご連絡下さい。

造影剤に関する不明点や造影剤を使用したくないという場合は、遠慮なくお問い合わせ下さい。

